

# Publisher's Review

パブリッシャーズ・レビュー

●東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙●



## みすず書房の本棚

[無料送付]

No.7 2013 夏

(表示価格は消費税込です)

113-0033 東京都文京区本郷 5-32-21 tel. 03-3814-0131 http://www.msz.co.jp

### ミシンから日本近代の ダイナミズムが見える

吉見俊哉



ミシンに見入る幕府派遣使節団の一行(ワシントンDC,1860年)

ひどく断片的な記憶なのだが、半世紀以上前、まだ子供だった頃、母が使っていたミシンでよく遊んでいた覚えがある。それはたぶんシンガーだったような気がするのだが、家のどこに置かれていたかは覚えていない。ただ、私は小さな体を踏み台とミシン本体の間に潜り込ませ、体の重心を揺らしてソーソのように動かすのを楽しんでいた。当時のミシンは鉄製で相当に重量感があり、体を揺らすとゆっくり機械が動く感覚が今も痕跡的に体に残っている。やがて中学生になる頃、古い家は建て替えられ、新しいミシンはダイニングキッチンに置かれたが、今度はずっと小型の電動式だった。キッチンの壁の戸棚にきっちり収まってしまうそれは、私が小さい頃に感じていた特別な存在感を失った。

一九七〇年代頃まで、こうした例はごくありきたりなもので、誰しも一九五〇年代のはじめ、日本の都市部では、なんと既婚女性は毎日二時間以上も縫いものをしていた。著者はこの数字にびっくりし、その謎を解こうとして、本書は生まれた。

このころ、女性・婦人雑誌には付録に洋服の型紙がつき、急速に売り上げ部数を伸ばしていた。「中流」意識が膨張しはじめ、消費社会の繁栄はすぐそこまで来ていた。

時代をさかのぼって、日本の家庭に最初に買ったミシンは、ジョン万次郎が母親に買ったものだった。そして二〇世紀初頭には、アメリカのシンガー社が世界初の成功した多国籍企業として、半世紀におよぶ経験の蓄積を持ちこむ。彼らのターゲットは家庭用ミシンの利用者だった。シンガーの販売戦略は徹底した現

経験していたことだった。それほどまでに、かつてミシンは私たちの生活に身近だった。本書はこの身近さの背後に、グローバルとローカル、戦時と経済成長、洋装と和装、近代生活のマーケティング、ジェンダーと階層をめぐる力学が集中していたことを鮮やかに教えてくれる。ラジオやテレビよりも、洗濯機や冷蔵庫のような家電製品よりも前に、ミシンは私たちの家庭生活に初めて導入された近代的機械技術だった。

テクノロジーは、決して技術的先端性や効率性だけでは社会化されない。ミシンが人々の日常に深く浸透していく際、先駆けとなったシンガー社が採用したのが、ピラミッド形状にネットワーク化された店舗と大量のセールスマン(外交員)、月賦販売による売り込みだった。本書が示すように、シンガー社はこの方式を世界標準として広めていった最初の

グローバル企業だった。やがてこの方式は、一方ではブラザーや蛇の目のような国産のミシン産業、松下のような家電メーカーや楽器産業によって引き継がれ、ローカル化された場合によってはそれが「日本的」なのだとも考えられていく。その販売方式の原点が、シンガー・ミシンの世界戦略の中にあつたのである。

しかし、シンガーが革新的な販売方式によって日本市場で独占的地位を築いても、女性たちの日常の服装が和装から洋装へ大転換と進んでいく限り、そもそものミシン市場の拡大には限界があつた。和服を縫ったり繕ったりするには、ミシンという機械は不適当だった。こうして本書は、ミシンが近代日本人のライフスタイルの変化、和装と洋装、さらには洋装でも工場生産された衣服の購買ではなく、布地をパターンにしたがって縫い上げていく洋裁の普及と

地化。全国のお店に販売員、集金人、「女教師」を配し、アメリカ式生活スタイルの流入を後押しする。一九二〇年代はじめには、日本のミシン業界ですべてに無敵の存在だった。

結局、第二次大戦をはさんで、二〇世紀の社会・経済的、文化的な変容のすべてを、ミシンは見ていることになる。のちの国産ミシンの隆盛、既製の席巻、フェミニズムの台頭にいたるまで。

著者は日本の政治経済史、労働問題に詳しい歴史家。ミシンに出会ったのは、生産者や官僚など、男性中心の歴史から、中流階級の歴史、消費者から見た物語に目を転じたことだった。そして斬新な視点に立った画期的な歴史書が誕生する。

二〇一一年秋、英語版の出版と呼

不可分に絡まりあつていて、それを明らかにしていく。技術の歴史が、一方では世界企業のマーケティング方式と、他方では人々のハビトゥスの変容やジェンダー構造の変化、「西洋」と「日本」の新たな区分の発明とダイナミックに結びついていたことを、具体的事例から明らかにしていく、スリリングな叙述である。

そしてこの和装から洋装への大転換が、文明開化やモダン生活の浸透とともにではなく、むしろ一九三〇年代から四〇年代にかけて、つまり総力戦体制下、国民がこぞつて戦時に向けて動員される中で生じたことを本書は見抜く。「戦時近代性」の有無を言わね「近代」への動員の中で、女性たちはそれまで慣れ親しんできた和装の習慣を捨て、最初は「機能的」なスタイルへと転換していった。この転換は、戦後のワン

## 「歴史家版「カーネーション」」

アンドルー・ゴードン

《ミシンと日本の近代 消費者の創出》

大島かおり訳

地化。全国のお店に販売員、集金人、「女教師」を配し、アメリカ式生活スタイルの流入を後押しする。一九二〇年代はじめには、日本のミシン業界ですべてに無敵の存在だった。

結局、第二次大戦をはさんで、二〇世紀の社会・経済的、文化的な変容のすべてを、ミシンは見ていることになる。のちの国産ミシンの隆盛、既製の席巻、フェミニズムの台頭にいたるまで。

著者は日本の政治経済史、労働問題に詳しい歴史家。ミシンに出会ったのは、生産者や官僚など、男性中心の歴史から、中流階級の歴史、消費者から見た物語に目を転じたことだった。そして斬新な視点に立った画期的な歴史書が誕生する。

二〇一一年秋、英語版の出版と呼

不可分に絡まりあつていて、それを明らかにしていく。技術の歴史が、一方では世界企業のマーケティング方式と、他方では人々のハビトゥスの変容やジェンダー構造の変化、「西洋」と「日本」の新たな区分の発明とダイナミックに結びついていたことを、具体的事例から明らかにしていく、スリリングな叙述である。

そしてこの和装から洋装への大転換が、文明開化やモダン生活の浸透とともにではなく、むしろ一九三〇年代から四〇年代にかけて、つまり総力戦体制下、国民がこぞつて戦時に向けて動員される中で生じたことを本書は見抜く。「戦時近代性」の有無を言わね「近代」への動員の中で、女性たちはそれまで慣れ親しんできた和装の習慣を捨て、最初は「機能的」なスタイルへと転換していった。この転換は、戦後のワン

ピースの流行やミシンの爆発的な普及にあって不可欠の前提だった。本書の複眼的な視座は、さらにこの和装から洋装への大転換が、ミシンの生産と普及システムの国産化、つまりシンガー社によって開発された世界標準方式をブラザーや蛇の目のような国産企業が取り入れ、「日本化」させていくプロセスと同時的だったことも明らかにしている。したがって、ここでの近代性は、一見「和」から「洋」への転換でありながら、同時に「グローバル」から「ナショナル」への転換でもあつた。

近代とは、重層的に矛盾を孕んだプロセスである。その複雑性は、ミシンが近代資本主義の中の女性の主体性について果たした両義的役割にも当てはまる。本書が看破するよう

に、ミシンの大衆的普及は、一方では近代産業機械が家庭にまで持ち込まれ、女性たちの労働が生産体制に組み込まれていく過程だったのだが、同時にそれは、女性が自らの工夫において、機械技術を取り入れながら服飾文化のジェンダー的主体になつていく過程でもあつた。シンガー裁縫女学院を卒業した女性ミシン指導員から戦後の洋裁学校とミシンの爆発的普及まで、著者はこの両義性を具体的に浮かび上がらせる。

一九八〇年代頃から、技術の社会的構築という観点から技術史と社会史を結ぶ様々な革新的な研究が世に出るようになった。近代社会は何重にも織り上げられた技術社会であり、その成り立ちを技術の社会的構築プロセスに注目しながら捉えることは決定的な意味をもつ。そのような流れと近代の日本史研究を結びつつ、本書はミシンという具体的なモノにあくまでこだわって、それが近代の歴史的文脈に深く分け入ることを可能にするのを実証している。

同様の研究は、タイプライターやカメラからテレビまで多様な技術で可能であろう。本書に先導されて、今後、日本でもそうした新しい技術社会史研究が次々に結実していくことを期待したい。

(よしみ しゅんや 社会学・文化研究 東京大学教授)

「わたしは想像もつかないことを経験した。わたしは生きています。」

著者のマグダ・オランダールは今年八六歳。一六歳の時にアウシュヴィッツに連行され、ハンガリー系ユダヤ人の数少ない生き残りとなった。収容所の日々、死の記憶、解放、そして、それから長い道のり。

三〇年の沈黙を経て、彼女は書き始めた。そしてそれをきっかけに、移住先のフランスで、中高生に自らの体験を語り伝える活動を始める。

「わたしの言葉は、このわたしのようにか弱い。この記憶を平凡なものにすることなく、重苦しいものにするのではなく、そして他人に苦しい思いをさせることなく伝えるにはどうしたらいいのだろうか？」

十代の生徒たちに語りかけるうち、彼女は再び書き始めた。そうして完成した本が

### ショアを生き延びた人が静かに語る

マグダ・オランダール＝ラフォン  
《四つの小さなパン切れ》

高橋 啓訳



ランスで出版されたのは二〇一二年、昨年のことだった。「わたしは、自分のなかに春の新鮮さと美しさを持っている。」

沈黙の中に生きてきた彼女が言葉とともに、息を吹き返すまで。死んでしまった仲間と新たな世代のために勇気をもって語られた、生きることの貴重な証言。

現代史・エッセイ (四六判・192頁・二九四〇円)

関連書 フランクル『夜と霧 新版』(二五七五円) パウゼウアング『そこに僕は居合わせた』(二六二五円) ヴィーゼル『夜』(二九四〇円)

### 生死を超えた交感のドラマ

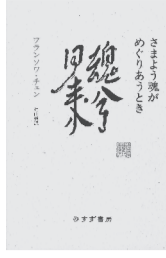
フランソワ・チエン  
辻由美訳 《さまざまう魂がめぐりあうとき》

アジア人初のアカデミー・フランセーズ会員作家の最新詩小説。中国の故事を素材にギリシヤ悲劇のようなスタイルで書かれた傑作である。

酒舗を営む夫婦に拾われた孤児春妹は、店にきた剣客荊軻、打楽器の名手高漸離の二人を知る。それぞれの苛酷な人生を超えて永遠に結ばれた男女三人の運命は？ 荊軻は秦の政王を暗殺しそこない細切れにされる。十年後、始皇帝を称した政王を高漸離が再び襲うが、これも失敗、凌遅

大戦後もなく故国を捨てたチエンが、数十年をかけて文学者となる過程と、フランス語への情熱を語るエッセイ『フィアログ(対話)』を併録。さらに訳者による著者インタビューが理解を深める。

バルトらに見出され、ラカンと相互に影響しあったチエンの文学は、東西をつないで近代小説の彼方にあるものを指し示している。「外国文学」



### 主体の死後におとずれる生

Mカッチャーリ 《死後に生きる者たち》

上村忠男訳 田中純解説

「死後に生きる者には言い分がありすぎて、ひとつの単純な真理では満足できないのだ。かれは無数の仮面を通り過ぎていき、どの仮面のうちにもとどまることがない。そして「このことが恐怖をかき立てる。これがかれの不気味なものにほかならない。」

アガンベンと並び、ベンヤミンの正統な後継者とも言うべき、現代イタリアおよびヨーロッパを代表する思想家の代表作。新ウィーン楽派、ム

### 患者「ゼロ」をたどる医学史

ジャック・ペパン 山本太郎訳

近年では治療薬の開発も著しいが、二〇世紀後半以降最悪のパンデミックをもたらしたH1N1は一体どこから来たのか。本書はその最も核心に迫った決定版である。

発端は植民地時代の中部アフリカ。チンパンジーの免疫不全ウイルスが一握りの狩人に感染しH1Vとなる。それは植民地医療政策下での大量の注射、そして売春によって

### 全史を一望する基本文献

ジャック・ペパン 《アーツ・アンド・クラフツ運動》

「アーツ・アンド・クラフツ運動の歴史をこのようなスケールで記述した日本語文献は管見では見当たらない」

クラフツマンシップ人間の労働をいかに回復するか。実用品にいかにか美的要素を盛り込むか。ジョン・ラスキン、ウィリアム・モリスらに影響をうけて十九世紀末のイギリスに生まれ、アール・ヌーヴ、オー、ウィーン分離派、ユート

「日記」を覗き見するのを楽し



### 体験者の生の声と資料による

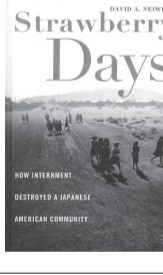
D・Aナイワート 《ストロベリー・デイズ》

ラッセル秀子訳 日系アメリカ人強制収容の記憶

ワシントン州ベルビューの日系アメリカ人社会の誕生、発展、崩壊までの経緯を追う。豊富な歴史資料を丁寧に繙き、体験者の詳細な証言を紹介した希少な一冊。

日系アメリカ人強制収容に ついては、山崎豊子の『二つの祖国』、TVドラマ『99年の愛』(TBS)など、小説やドラマでも取り上げられてきた。しかし体験者の生の声と資料による文献は少ない。

本書は、ごく普通の日系人の証言を記録することで、埋もれた日系人の姿を赤裸々に浮彫とする。様々な歴史資料を参照し、強制収容がどのような文化・社会・政治的な背景



### 幻の国をもとめて

池内紀 《消えた国 追われた人々》

「東プロシア……生まれた国と育った国、いまや、人が国を選び、あるいは捨てて、国を捨て、あるいは捨てられ、そのものが人によって選ばれる。第二次世界大戦末期に、力づくで捨てさせられたとき、千二百万人をこえるドイツ(難民)が生まれた。それははからずも、いち早く二十世紀を先取りしていた」(あとがき)

東プロシアという国はいつ生まれ、またいつ、どのような形で消えたのか？ 首都はケーニヒスベルク、古くは中世に遡る歴史をもち、多民族が共存し、豊かな文化を維持してきた。コペルニクスが星を見上げ、カントが「純粋理性批判」を書いた国。しかしこの国も戦禍を免れず、ヒトラーとスターリン、第二次世界大戦は国土を一変させた。著者は今はなき国をもとめて

三度の旅を重ね、闇に埋もれた過去を尋ね、現在を探ってゆく。時の成熟から生まれた紀行記の名品。写真、池内郁。『歴史・紀行』(四六変型288頁・二九四〇円)

### 秘められた日記を読み解く

岡照雄 《官僚ピープス氏の生活と意見》

サムエル・ピープスといえ、海軍関係者からの頻繁な賄賂受領や女性への度重なる(アブナイ)言動がまず話題になる。しかし彼の真価は海軍官僚としての抜群の働きにある。女性関係をほじくめ、秘密にしたい事柄を暗号によって書き記した秘められた

「日記」を覗き見するのを楽し

### みすず書房新刊

(2013・1・5) 東京文京本郷5-1-1 三三三(三三三) (価格は税込です)

#### ロレンス遊歴

井上義夫 精緻な作品分析によって、神話の解体から存在の闇を照射する。伝記を批判的に検証した第一級の作家・作品論。四四二〇円

#### 善意で貧困はなくせるのか？

善之助の行動経済学

カーラン・アペル 人間心理の欠点を回避する手法を多数盛り込み、開発経済学の今をやさしく紹介。清川 澤田解説 三二五〇円

#### 大戦間期の宮中と政治家

黒沢文貴 裕仁親王の結婚をめぐる「宮中某重大事件」はじめ、浜口雄幸、田中義一など人物群像から見る時代の真の姿。四二〇〇円

#### 漁業と震災

濱田武士 経済・辺陲の社会に人の「なりわい」をとり戻す。漁業を再生し、自然・集落・食文化を守るための漁業経済学。三二五〇円

#### 合理的選択

ギルボア ミクロ経済学、ゲーム理論、意思決定理論のエッセンスを平易な言葉で語る経済学からの贈り物。松井彰彦訳 三三六〇円

#### 銀嶺に向かつて歌え

クワイマー小川登喜男 深野穂生 一ノ倉沢、屏風岩、冬の穂高や剣岳の初登攀者。帝大生のアルビニスト。昭和初年代の天才クワイマーの肖像。二九四〇円

#### ボスニア紛争報道

メリアの表象と翻訳行為 坪井睦子 偏向報道の陥穽を翻訳の視点から浮彫にした問題提起の書。国際報道における翻訳の不可視性と政治性に挑む。六八二五円

#### 正直シグナル

非言語コミュニケーションの科学 ベントランド MITEメデアラボの最先端的研究が切り拓く、人間の意思伝達とネットワークの未来。柴田 安西解説 二七三〇円

#### ソウル・マイニング

音楽的自伝 ダニエル・ラノワ U2、ディランのプロデュサーが、演奏・録音の秘密と自身の音楽哲学を公開。鈴木コウユウ訳 三九九〇円

#### 気候変動を理学的に

古気候学が変える地球環境観 多田隆治 さまざまな時間スケールで気候変動を線形・非線形・動的な地球像を描出し、来るべき環境危機の本質に迫る名講義。二五二〇円

#### 戦後史の中の英語と私

鳥飼致美子 同時通訳者としての活躍、英語教育最前線での奮闘、通訳翻訳学樹立への情熱。挑戦の軌跡をたどった自伝。二九四〇円

#### 日本の200年

徳川時代から現代まで新版 ゴードン ロングセラーを大幅に改訂増補。アジアの視点を強化して、三・一一以後までをあらたに論じる。森谷文昭訳 三七八〇円

#### 日本の200年

下 徳川時代から現代まで新版 ゴードン 第二次大戦から、リーマン・ショック、東日本大震災まで。二世紀を俯瞰し、はじめて見えること。森谷文昭訳 三九九〇円

#### ポスト・クライン派の精神分析

クライン派の精神分析の発展と美の圏域 サンドラス 「美」と「真実」はいかに人間に関わるか。臨床記述(夢)を素材に、概念への理解を深める。中川慎一郎監訳 三七八〇円

#### 心理学的自動症

人間行動の根の諸形式に関する実験心理学論 ジャネ フロイトと並ぶ精神医学の祖が無意識を発見し、心理学という新しい学問に結実させた歴史的名著。松本雅彦訳 七三三〇円

#### アイルランドモノ語り

榎本伸明 シング『アラン島』の名記者がタプリンの街角で見た「モノ」達から彼の国の歴史をひもとく紀行文集。三七八〇円

#### ヨーゼフ・ボイスの足型

若江漢字/酒井忠康 伝説的な前衛芸術家の素顔に迫った美術家と韻末を見守った旧知の批評家によるコラポレション。四四二〇円

#### 大隈重信関係文書

福沢諭吉書翰22通はじめ、前島密、牧野伸顯、益田孝、松方正義など98名・808通。早稲田大学大学史料センター編 二六〇〇円

#### 遠ざかる景色

野見山映治 九十歳を超えてなお降々たる画家「エッセイ」が描く出会いと別れ。鮮やかによみがえる十九歳の肖像画。二九四〇円

#### 大人の本棚

本読みの軌道 田中真澄 児童書再読から「日々の糧」古本行脚まで。映画・文化史家が縦横に綴った読書のけものみち。稲川方人解説 二九四〇円

#### 大人の本棚

白い人ひと ほか短篇とエッセイ ハーネット「小公女」の作者が早世した愛意への想いをこめて紡いだ幻想的な表題作に、初邦訳の三篇を付す。中村妙子訳 二九四〇円

#### 自分だけの部屋

ウルフ 経済的自立と精神的独立を主張し、女性の受難史を明らかにしたフェミニズム批評の聖典。「新装版」川本静子訳 二七三〇円

# 20世紀の探究／世界の探究

多木浩二 今福龍太編 《映像の歴史哲学》

「考えてみると人間を構成しているのは、大変な思想であつたり、芸術であつたりするよりもまず日常生活なのです。日常生活こそが人間の文化をつくりあげているひとつの技なのです。カントはこれを「クンスト」と呼んでいますが、この「クンスト」を守り抜けるかどうか、この戦争化した世界のなかでなによりも大切なことです」

芸術学・哲学を中心とした多木浩二(一九二八—二〇一〇)



講義する多木浩二

「二〇世紀のさまざまな出来事について考えなければなりません。そのなかにはやはり未来派が入り、『オリンピア』が入ってくる。そこから始めて二〇世紀を考える方法というのが見いだせるのだと思つています。一九四〇年頃、子ども時代に生まれて初めて見たリーフェンシュタールの映画『オリンピア』にはじまり、自身が関わった写真雑誌『プロヴォーク』を中心に、中平卓馬や東松照明と

「七月下旬刊」  
【現代思想・芸術】  
「二〇世紀のさまざまな出来事について考えなければなりません。そのなかにはやはり未来派が入り、『オリンピア』が入ってくる。そこから始めて二〇世紀を考える方法というのが見いだせるのだと思つています。一九四〇年頃、子ども時代に生まれて初めて見たリーフェンシュタールの映画『オリンピア』にはじまり、自身が関わった写真雑誌『プロヴォーク』を中心に、中平卓馬や東松照明と

## 法学・社会学的な概念整理

D.J.ソローウ《プライバシーの新理論》 大谷卓史訳

「プライバシー問題を考えるうえで本書の大きな意義は、情報技術の発達および社会・経済の変化による概念の広がりを法学・社会学的に扱える形に要約したところにある。それに加え、多様な現象を総合的に理解するため、最新の

## 本と人を繋ぐエピソード満載

宮田昇 《図書館に通う》

「公立無料貸本屋」事情を学校として育った逸話、図書館と著作権の問題をはじめ誰も書かなかった、本と人を繋ぐエピソードを満載。アイデアにみちた提案とともに、デジタル・ネットの時代に、図書館も書店も出版社も、ともに活躍できる道を探る。「エッセイ・本・図書館」(四六判・256頁・二二二〇円)

## 透明な境地を示す新詩集

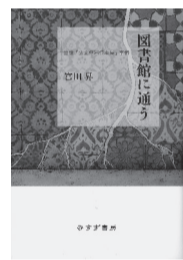
長田弘 《奇跡—ミラクル—》

「奇跡—ミラクル—」は、東日本大震災の年末に出した『詩の木の下で』の前から今春までの新作三十篇から成る。巻頭を飾る四篇「ベルリン詩篇」は、ドイツ文学を学び、二十世紀の歴史と文学を見つめてきた詩人が、この街を訪れ、心に響いたことがらを歌う。コルヴィッツ、ベンヤミンなど固有名詞の喚起力が私たちの眼を開かせる。詩人は寒暖計のように、空気と植物に敏感だ。そして、知恵に満ちている。「必要最小限プラス」。人の権利はそれ

## 虫たちと捕食者たちとのせめぎあい

G.オールドバウアー 《食べられないために》 中里京子訳

昆虫の偉大な役割、それは「食べられること」だ。昆虫は貴重な栄養源として、生態系を支えている。だが虫たちの方もおとなしく食べられないわけではない。何百匹もの蝶が突然旋回し、鳥を巻き込んでしまう。大きな芋虫は巧みに首を振り回し、蛇そっくりの動きをする。これはフィクシ



図書館に通う

## 大人の本棚

ハイブリッド・クライスト 山下純照訳 《こわれがめ》 付・異曲

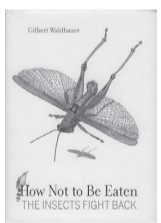
ドイツロマン派の興隆期に破滅的な生涯を自死というかたちで閉じたクライスト。現在、ドイツ三大喜劇の一つとして人々に愛される本作は、クライストの徹底した悲劇作品の中で一見、異質とも見える。削除された「異曲」と初期手稿を付し、オリジナルの作者の意図に迫る。「外国文学」(四六判・198頁・二九四〇円)

## 草の葉 初版

ホイットマン 《草の葉》 高田英俊訳

ホイットマンは詩集『草の葉』を、一八五五年の初版以来、生涯をかけていくつも版で拡張・訂正しつづけた。それによって最終版(一八九一年)は初版の五倍ほどの分量に膨れあがった。南北戦争の前夜、類例のない汎神論的宇宙論を謳ってアメリカの始まりを告げた世紀の傑作の、新鮮でコンパクトな初版に基づく初めての訳詩集。「外国文学・詩」(四六判・264頁・二九四〇円)

## 月刊雑誌 《みすず》 最近号より



加藤秀俊「本のヴァインテージ」／飯島みどり「パービィ・ヤールへの道」／保坂和志「素振りについて」／中村健之介「ソ連時代のドストエフスキー研究者たち」(四月号) 酒井啓子「十年ののち」／関口裕昭「アンゼルム・キーファーとパウル・ツェラン」／ピエール・ルヴェルディ「死者たちの歌」／大谷卓史「ネット選挙解禁」／辻由美「拡大する図書館グランプリ」／上村忠男「紀州・和歌浦での仮面パフォーマンス」(五月号)。「新連載」原武史「日記」／最終回「野口良平」メタフィジカル・クラブの周辺／明田川融「核兵器と国民の特殊な感情」(六月号)。連載は小沢信男、池内紀、佐々木幹郎、植田美ほか(各二二五頁)

## 書評コラム

ジャネには著作集も全集も、その名を冠した学派もない。十九世紀末のピーク時から第二次世界大戦後に至るまで、盛衰著しい力動精神医学の領域を、いわば単独で横断した心理学者である。しかもその後半生その名は忘れられ、著作の復刊は絶対ないと出版社に宣言された事実をエレンベルガーは書き留めている。それが奇跡的に蘇ったのは解離や外傷性記憶が改めて注目されるようになった一九八〇年以降のことだ。

## 江口重幸 《心理学的自動症》を読む



「心理学的自動症」(原著一九二三年刊)をはじめて手にしたのは一九八一年。それから三〇年余りを経て今年

それは、具体的にはカタレプシーや夢遊病や感覚麻痺や健忘などの現象である。ジャネは下意識自動症という概念を携えて、事例への催眠を中心に綿密な観察を重ね、迷路のごとき領域を探索する。彼はその後「ふ

本書が出版された一八八九年は、フランス革命百年を記念してパリ万博が開かれ、エッフェル塔が建設された年である。当時はシャルコーに代表されるように、心理学、精神医学、神経学、哲学、宗教、心霊

## 通訳・翻訳研究の〈いま〉を読む

- 鳥飼玖美子 《戦後史の中の英語と私》 アポロ月面着陸の宇宙中継、大阪万博の同時通訳、「百万人の英語」、現在はNHK「ニュースで英会話」で活躍、通訳学・翻訳学の確立をめざす。書き下ろし自伝エッセイ。四六判 2940円
- 鳥飼玖美子 《通訳者と戦後日米外交》 戦後日米関係の構築に深く関わった通訳者へのインタビューをとおして、外交史における通訳の社会・文化的意義を探った本格的な研究書=希有なドキュメント。四六判 3990円
- 武田珂代子 《東京裁判における通訳》 通訳者の採用過程や通訳手順を再現・分析し、法廷でのプロセスを明らかにした通訳学・政治社会学の成果。四六判 3990円
- 鳥飼玖美子・野田研一・平賀正子・小山亘 編 《異文化コミュニケーション学への招待》 社会学、環境学、言語学、通訳翻訳学をふまえて、言語文化をめぐる最先端の人文・社会科学の方法と思想を紹介。A5判 6300円

## 知の広場 図書館と自由

ポロニーニヤ・サラ・ボルサ、フィレンツェ・オペラテをはじめ多くの図書館の企画運営アドバイザーを務め、魅力あふれる図書館を次々に生み出しているアントネッラ・アンニョリ氏。このほど来日し、建築家の伊東豊雄氏との対談「知の広場とみんなの家」(宮城県仙台市・せんだいメデアターク)を皮切りに、各地で講演会や特別講義が催されました。地域の人々が学び、憩い、交流する公共空間としての、新しい図書館。その可能性を探るアンニョリ氏の言葉は未来の図書館のありかたに新鮮な風を送りました。



